

文明哲学研究所第1回平和文明会議開催にあたって(ご挨拶)

2013年5月17日 尾池和夫

平和文明会議の第1回開催にあたって、文明哲学研究所の本部がある京都造形芸術大学学長から、ひと言ご挨拶を申し上げます。

文明哲学研究所は、核廃絶と世界平和に向けて、京都造形芸術大学と東北芸術工科大学の共同研究機関として、昨年、2012年10月27日に設立されました。その後、井原甲二所長を中心に研究活動の準備が着々と進められ、専門家による研究会議として、この平和文明会議が設定されました。その他にも、今後、さまざまな研究活動が企画されているとかがっております。

私も文明哲学研究所の設立発起人として、この研究所の設立に参加しており、この会議においても、地球科学者の一人として、また、大学での教育と研究と社会貢献の活動に、50年ほど関わって来た者の一人として、力の限りを尽くして参りたいと決意しております。今日から、この会議にご参加下さる皆さまに、ここからお礼申し上げるとともに、大いなる期待のもと、ご協力をお願い申し上げます。

文明哲学研究所の設立理念は、徳山詳直理事長によって、高らかに宣言された「文明哲学研究所設立宣言－核廃絶と世界平和のために－」に表現されています。私もその宣言を繰り返し読んでおりますが、読み返すたびに新しい意味を見つける状況が続いております。この会議での、これからの議論を通じて、さらにその宣言の意味を理解し、その目指すところの理解を深めていくことになるであろうと考えております。

また、この研究所の活動の内容を、いわば時々刻々、世界に向かって発信していくことが、設立の理念を実現するために必要であろうと、私は考えています。そのために、このご挨拶でも、具体的な提案の一つをお話したいと思えます。広報の仕組みの一つとして、この研究所の持つ意味と研究活動を紹介するメディアに関してのご検討を、皆さま方をお願いしたいということです。

本学の春の顔見世覧会で私が展示したのは、犬山にある霊長類研究所のチンパンジーの一人であるアイが、私の学長就任祝いに描いて送ってくれた一枚の絵でした。その絵によって、芸術とは何か、人とは何かを考えてほしいというメッセージを伝えようとしたのです。今日は、そのことではなく、霊長類研究所の活動をストーリーマンガで表現した例をお見せしたいと思うのです。マンガで、しかも4か国語のマンガで表現した例です。

この研究所の設立理念を、本学のマンガ学科をはじめとする全学科の学生たちに提示し、そこから受け取る意味を、自分自身の表現で、マンガで、あるいは紙芝居で、あるいは動画で、作品として描いてもらうことを提案したいのです。言うまでもなく、この設立宣言の意味を世界に伝えることそのものも、この研究所の役割の一つです。その手段として、宣言を文字で、各国語で伝えようとするだけでなく、あらゆる手段を活かして、本学の特長を取り入れながら、例えば、マンガ学科のストーリーマンガコースの活動の一つとして、設立宣言の表現を具体化するという試みを提案します。そのような芸術活動のプロセスを通じて、まず本学の学生が設立宣言の理解を深めること、そのことが研究所の活動の第一歩ではないかという、私の考えであります。

パブロ・ピカソの「ゲルニカ」に見られように、あるいは、パブロ・カザルスの「鳥の歌」の演奏のように、芸術活動には平和をもたらせる直接の能力はないかもしれませんが、それらに触れた人びとのところに、平和へと向かう強い意志を持たせる力があります。芸術立国を目ざす本学の理念を具体化する一つのきっかけとして、この私の提案をご検討いただきたいと思います。

今日の半日、これからまず、座長のお話をしっかりとうかがい、皆さま方のご発言にしっかりと耳を傾け、私自身の理解を深めていきたいと思っています。これからの永い道程を、情報と思想の理解を共有しながら、核廃絶と世界平和の実現に向けて歩んで行くこととなりますが、よろしくようお願い申し上げます、私のご挨拶といたします。

ありがとうございました。